

真実を知ってください

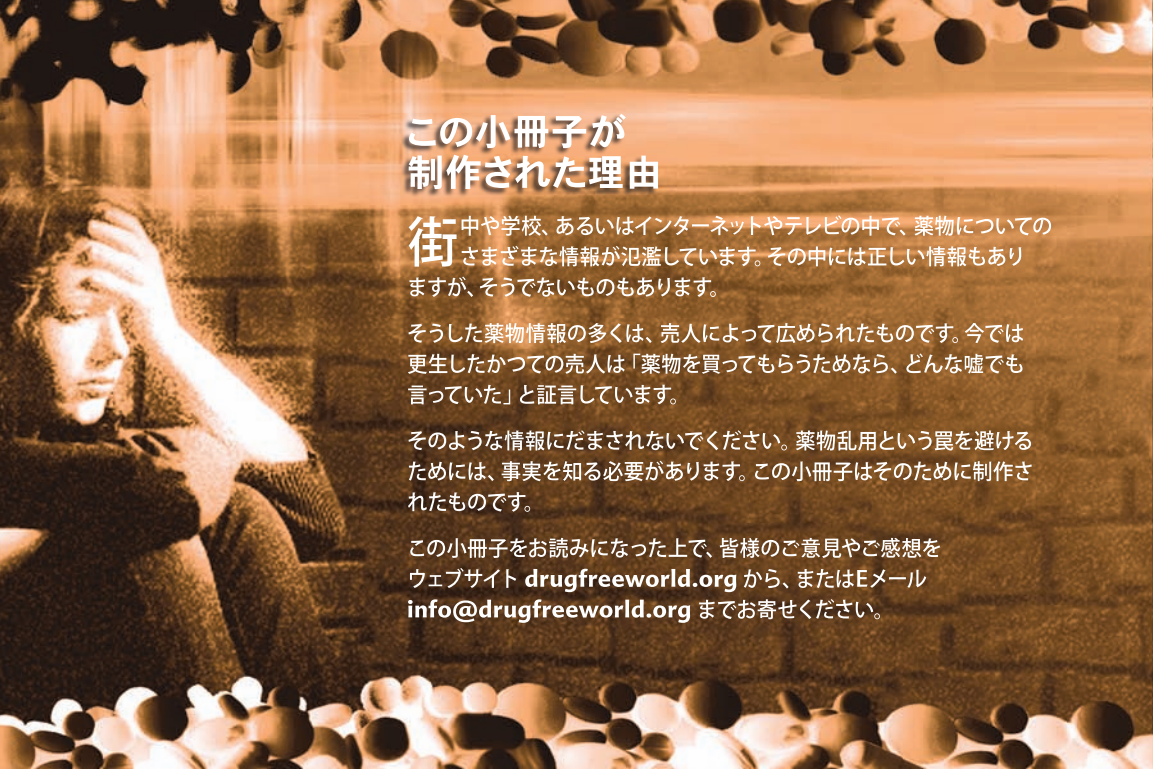
処方薬乱用

キャンディー

青玉 赤玉

ダウナー 眠剤

drugfreeworld.org



この小冊子が 制作された理由

街中や学校、あるいはインターネットやテレビの中で、薬物についてのさまざまな情報が氾濫しています。その中には正しい情報もありますが、そうでないものもあります。

そうした薬物情報の多くは、売人によって広められたものです。今では更生したかつての売人は「薬物を買ってもらうためなら、どんな嘘でも言っていた」と証言しています。

そのような情報にだまされないでください。薬物乱用という罠を避けるためには、事実を知る必要があります。この小冊子はそのために制作されたものです。

この小冊子をお読みになった上で、皆様のご意見やご感想をウェブサイト drugfreeworld.org から、またはEメール info@drugfreeworld.org までお寄せください。

処方薬の乱用は 深刻な問題を引き起こす

快 楽や陶酔感を得る目的で処方薬を乱用するという行為が十代の若者の間で広まり、深刻な問題となっています。アメリカ合衆国での全国調査によると、十代の若者が処方薬の乱用に走る可能性は、違法なストリート・ドラッグに手を出す可能性よりも高いとのこと。

多くの十代の若者が、処方薬は医師が処方したものなのだから安全だと考えています。しかし、医療ではなく、陶酔感や高揚感を得たいといった目的で処方薬を摂取したり、適切な医師の指示を得ないで自分の判断だけでそうした薬を取ったりすることは非常に危険です。それは違法なストリート・ドラッグを乱用するのと実質的に同じであり、同様の依存症をもたらす恐れがあります。

処方薬を取ることに非常に深刻な健康上の危険性を伴います。そのため処方薬の摂取は、医師の監督下に限られています。その場合でさえ、依存症や副作用などを

避けるために、注意深く監視されなくてはなりません。

薬の錠剤はどれも同じように見えます。中身が何なのかわからない錠剤や、自分に処方されたものではない錠剤を取るのは極めて危険です。また、体の状態には個人差があるため、同じ薬であっても起こる反応は人によって違います。ある人にとっては問題のない薬物でも、別の人にとっては非常に危険な場合があり、死を招く可能性さえあります。

処方薬は、他の人に対してではなく、自分自身に対して処方された場合に限り安全なものとなります。

処方薬についての あまり知られていない事実

アメリカ合衆国麻薬取締局によって、アヘンやコカインと同じカテゴリーに分類されている処方薬は数多くあります。なぜなら、そうした薬には乱用や依存症の可能性があるからです。リタリンやデキセドリン（中枢神経刺激剤）、鎮痛剤のオキシコンチン、デメロール、ロクサノールなどがこれに該当します。

現在違法とされているストリート・ドラッグの多くは、かつては医師や精神科医が使用したり処方したりしていたものです。そうした薬物は、容認できないほどの有害な影響が表面化したため、使用を禁止されたのです。ヘロインやコカイン、LSD、メタンフェタミン（覚せい剤）、エクスタシー（MDMA）などがその例です。

処方薬の乱用は、違法なストリート・ドラッグの乱用よりも危険な場合さえあります。処方薬として使用される化学薬品の中には、非常に作用が強く、過剰摂取（オーバードーズ）を招く危険性が高いものがいくつかあります。これは、特にオキシコンチンやそれと同種の鎮痛剤に当てはまります。この種の鎮痛剤の過剰摂取による死亡事故は、過去5年の間に倍増しています。

資格を持たない人が医師の処方なしに処方薬を販売したり配布したりする行為は、ヘロインやコカインの密売と同様に犯罪として扱われ、罰金や懲役を科せられます。しかし、多くの人がこのことを認識していないようです。アメリカでは、薬物の取引が死亡事故や重度の傷害につながった場合、その取引に関与した者は終身刑に処せられる可能性があります。

乱用される処方薬の種類

娯 楽目的で乱用される処方薬には、主に以下のような種類のものがあります。

- 1. 鎮静剤・安定剤：**脳の働きを鈍くする薬物で、中枢神経（脳と脊髄）抑制薬とも呼ばれます。これらに含まれるのは、鎮静剤（人を静かにして眠たくさせる目的で使用）、抗不安剤（緊張や不安を解きほぐす目的で使用）があります。
- 2. オピオイド*およびモルヒネ系鎮痛剤：**俗に「痛み止め」と呼ばれるこれらの薬品には、アヘンやアヘンに類似した物質が含まれており、痛みを和らげるために使用されます。
- 3. 中枢神経刺激剤：**服用するとエネルギーや鋭敏さが一時的に増す薬品です。同時に血圧や脈拍、呼吸数も増大させます。
- 4. 抗うつ剤：**うつ症状を抱える人に処方される向精神薬です。

* オピオイド：アヘンに類似した作用を持つ合成物質の総称。



鎮静剤・安定剤

鎮 静剤や安定剤は、俗に「ダウナー」とも呼ばれ、さまざまな色の錠剤やカプセル、あるいは液状薬として販売されています。ジプレキサやセロクエル、ハルドールなどの抗精神病薬（いわゆるメジャー・トランクライザー）はこのカテゴリーに入ります。抗精神病薬は精神疾患の症状を軽減するとされています。セルシンやレンドルミン、ハルシオン、リブリウムは「ベンゾジアゼピン系」と呼ばれる鎮静剤・安定剤です。イソミタールやラボナ、フェノバルなどはバルビツール酸系催眠薬（鎮静剤や睡眠薬として使用される薬物）に分類されます。一般によく知られている薬品名には、以下のものがあります。

薬品名

- セルシン
- ベイリウム
- ハルシオン
- リブリウム
- ワイパックス
- レンドルミン
- イソミタール
- ラボナ
- フェノバル
- フェノバルビタール

* ベンゾジアゼピン：精神安定剤の一種。筋肉を弛緩させ、精神的な興奮を鎮める作用がある。

鎮静剤・安定剤による 短期的な影響

鎮

鎮静剤・安定剤による短期的な影響には、以下のようなものがあります。

- 脳の機能低下
- 血圧の低下
- 混乱
- 目まい
- 発熱
- 視覚の異常
- 方向感覚の喪失
- 排尿障害
- 脈拍と呼吸の低下
- 集中力の低下
- 極度の疲労感
- ろれつが回らない
- 脱力感
- 瞳孔拡大
- 抑うつ
- 依存症

薬を取る量が増えると、記憶力や判断力、調節機能が損なわれることに加え、神経過敏、被害妄想^{*}、自殺衝動などを引き起こす恐れがあります。激しい興奮や攻撃性など、意図された作用とは正反対の影響が起こる場合もあります。

鎮静剤や安定剤をアルコールなどの他の物質と併せて使用すると、呼吸と心拍数が遅くなり、死に至る恐れさえあります。

^{*} 被害妄想：他人に対して根拠のない疑い、不信感、恐れを抱く状態のこと。

鎮静剤・安定剤による 長期的な影響

多くの鎮静剤や安定剤には「耐性」が得意という性質があるため、同じ作用を得るために必要な摂取量が次第に増えていきます。使用者が以前と同じ「ハイ」の状態を求めて摂取量を増やしていくと、場合によっては過剰摂取となり、昏睡状態や死に至ることがあります。

鎮静剤や安定剤を長期間にわたって使用すると、うつ状態や慢性疲労、呼吸困難、性機能の障害、睡眠障害などを招く恐れがあります。薬物への依存度が増すため、使用者は薬物を取ることができないと、薬物への渴望や不安、パニックなどに襲われるのが普通です。

鎮静剤や安定剤の禁断症状には、不眠症や虚弱、吐き気などがあります。大量摂取を続けてい

る使用者であれば、過度の興奮や体温上昇、妄想、幻覚、^{けいれん}痙攣が起こる可能性があります。大部分の薬物の禁断症状と異なり、鎮静剤や安定剤の禁断症状は命に関わる場合があります。

さらに、この種の薬物は高血糖や糖尿病、体重増加（50キロ近く増加した例も報告されています）などの危険性を増大させる恐れがあります。

アメリカ合衆国食品医薬品局の4年分のデータに基づいて、USAトゥデイ紙が実施した研究によると、抗精神病薬（鎮静剤・安定剤の一種）は、心臓障害や窒息、肝不全、自殺による45人の死亡例の主要な原因だったということです。

「**私**は処方薬（ジプレキサ）を2度過剰
摂取して倒れたことがあるの。

同じ薬のせいで親友も亡くなった…

自分がよく知りもしない薬を友達に
あげたせいで、その友達を死なせて
しまうなんて、これほど辛いことは
ないよ。」— リンダ

ロヒプノール

ロヒプノールは、ベイリウムの10倍も強力な催眠鎮静剤です。白かオリーブ色の錠剤で、通常は気泡シートに包装したものが販売されています。乱用者はこの錠剤を砕き、粉末を鼻から吸入する、マリファナに振りかけて喫煙する、飲料に溶かす、注射するといった方法で使います。

薬品名

- ロヒプノール

通称

- フォーゲット・ミー・ピル
- メキシカン・ベイリウム
- R2
- ローシュ
- ルーフィーズ
- ルーフィノール
- ロープ
- ロフィーズ

ロヒプノールの作用

ロヒプノールは、しばしば性的暴行に悪用されてきました。被害者を抵抗できない状態にする目的で使用されるため、「レイプ・ドラッグ」と呼ばれています。

ロヒプノールの使用者によれば、この薬物には心身を麻痺させる作用があるとのこと。その作用は薬を取ってから20～30分後に始まり、2時間以内にピークを迎え、8時間から12時間も続くことがあります。その場にへたり込み、動けなくなる場合もあります。目を開けたまま横たわり、周囲の出来事を観察することはできますが、全く動くことができません。

記憶力が損なわれるため、後になって起こったことを全く思い出せません。

使用者は、筋肉の麻痺、意識の混乱、眠気、記憶喪失などを体験します。

ロヒプノールは、ヨーロッパと南米で睡眠薬として販売されていますが、アメリカ合衆国では違法薬物とされています。



オピオイドおよびモルヒネ系鎮痛剤

オピオイドは、神経系に作用して痛みを和らげる薬です。治療のためであれ乱用目的であれ、使用し続けると身体的な依存や禁断症状を招く恐れがあります。この種の鎮痛剤は錠剤やカプセル、液状薬の形で販売されています。

一般によく知られている薬品名には、以下のものがあります。

薬品名

- リン酸コデイン
- フェンタニル
- MSコンチン
- 塩酸モルヒネ

薬品名

- ロクサノール
- オキシコンチン
- デメロール
- ジラウジッド

オピオイドおよび モルヒネ系鎮痛剤 による短期的な影響

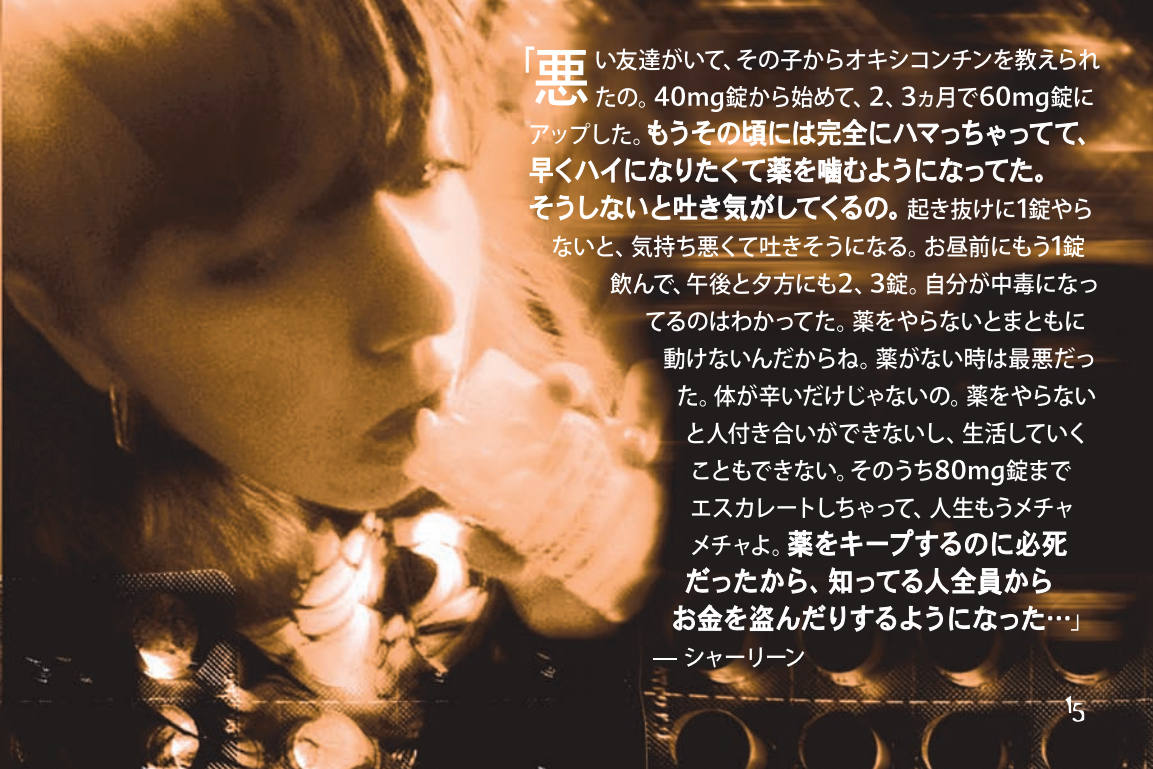
オピオイドや
モルヒネ系鎮痛剤の
短期的な影響には
以下のようなものが
あります。

- 眠気
- 呼吸の抑制
- 重度の便秘
- 無意識
- 吐き気
- 昏睡状態

オピオイドおよび モルヒネ系鎮痛剤による長期的な影響

オピオイドを継続的に使用すると、身体的な依存や中毒を招く恐れがあります。身体が薬物なしには機能できない状態になっているため、量を減らしたり使用を止めたりすると、禁断症状が起こります。禁断症状には、情動不安、筋肉や関節の激しい痛み、不眠、下痢、嘔吐、鳥肌を伴う強烈な悪寒（コールド・ターキー）などがあります。また、薬物に対する「耐性」ができるため、同じ作用を得るために必要な摂取量が増えていく可能性があります。

鎮痛剤の乱用についてのより詳しい情報は、この小冊子シリーズの「真実を知ってください：鎮痛剤乱用」をごらんください。



「**悪**い友達がいる、その子からオキシコンチンを教えられたの。40mg錠から始めて、2、3ヵ月で60mg錠にアップした。もうその頃には完全にハマっちゃって、早くハイになりたくて薬を噛むようになってた。そうしないと吐き気がしてくるの。起き抜けに1錠やらないと、気持ち悪くて吐きそうになる。お昼前にもう1錠飲んで、午後と夕方にも2、3錠。自分が中毒になってるのはわかってた。薬をやらないとまともに動けないんだからね。薬がない時は最悪だった。体が辛いだけじゃないの。薬をやらないと人付き合いができないし、生活していくこともできない。そのうち80mg錠までエスカレートしちゃって、人生もうメチャメチャよ。薬をキープするのに必死だったから、知ってる人全員からお金を盗んだりするようになった…」

— シャーリーン

中枢神経刺激剤

中 枢神経刺激剤は、エネルギーや鋭敏さを一時的に増加させる薬品です。俗に「アッパー」とも呼ばれます。最もよく乱用されるストリート・ドラッグの中で、このタイプに分類されるのはコカインと覚せい剤です。

処方薬の中枢神経刺激剤は、錠剤やカプセルの形で販売されています。そのまま飲むか、液体にしたものを注射するか、砕いたものを鼻から吸入するといった方法で乱用されます。

一般によく知られている薬品名には、次のようなものがあります。

薬品名

- リタリン
- コンサータ
- ベタナミン



中枢神経刺激剤による 短期的な影響

中 枢神経刺激剤による短期的な影響には、極度の疲労、無気力、抑うつ（「アップ」の状態の後に生じる「ダウン」状態）などがあります。このような極端な落ち込みがすぐに起こり、継続するため、使用者はすぐにまた薬を欲しがるようになります。やがて「ハイ」になるためというよりも、とにかく活力を取り戻して「普通の状態」になるためだけに薬物を必要とするようになります。

中枢神経刺激剤による 長期的な影響

中 枢神経刺激剤を使用すると依存症になる恐れがあります。短期間に複数の中枢神経刺激剤を繰り返し大量摂取すると、攻撃的になったり被害妄想に陥ったりする可能性があります。また、体温が異常に上昇したり、不整脈を起こしたりする場合があります。

中枢神経刺激剤（処方薬）の乱用についてのより詳しい情報は、この小冊子シリーズの「真実を知ってください：リタリン乱用」をごらんください。

抗うつ剤

処 方薬の中で、抗うつ剤も乱用目的で使用される場合があります。プロザック、パキシル、デプロメール、ルボックス、ゾロフトなどが一般的な抗うつ剤です。さまざまな色のカプセルや錠剤の形で販売されています。

研究によると、この種の薬物には以下のような副作用があることがわかっています。

- 不眠症
- 神経過敏
- 緊張、不安
- 暴力衝動、暴力行為
- 激しい興奮
- 自殺衝動、自殺
- 震え
- 敵意
- 発汗
- 不整脈

- 攻撃性
- 犯罪的な行動
- 混乱、一貫性のない思考
- 被害妄想
- 幻覚
- 精神異常
- 静座不能
(じっと座っていることができない、
極端な興奮状態)

ある研究によると、抗うつ剤を服用している若者の14%が攻撃的になり、暴力的になる場合もあることがわかりました。ある12才の少年は、クラスメートを殺害し、その後銃で自殺するという暴力的な悪夢を見ました。その夢は目覚めてからも「非常に現実的」に感じられるものでした。少年は数日にわたってこのような夢を見続け、その現実感は増していく一方でした。少年は激しい自殺衝動を感じるようになり、ついに薬の服用を止めました。

「**早**く薬をちょうだいて脳が叫んでるような感じ。薬がない
時の気分はとても我慢できるようなものじゃない…」

私がエフェクサーの禁断症状を抜けるには、もっと助けが必要
だと思う。うつ状態がひどくて、リストカットするようになった。
どうしてそうなっちゃうのか自分でもわからない。それに、
何時間かおきに幻覚が見えるの…今日は壁から血がしたり
落ちているのを見たわ。」—リタ

上記の研究では、この種の薬物を服用した人による極端な行動や不合理な
振舞いの例がいくつも紹介されています。ある男性は、銃を奪って自殺する
ために、警察官を車ではねました。2人の幼い子供を道連れに浴槽で自殺
した男性もいます。ある少年は、明確な理由もなく自分の親友をバットで
殴って死亡させました。こうした事例のうち、薬の服用以前に暴力行為
の経歴があった人はひとりもいません。

抗うつ剤の禁断症状は次のようなものです。自殺衝動、攻撃性、不安、
抑うつ、泣き続ける、不眠、目まい、嘔吐、頭痛、震え、脳に電気ショックを
受けたような感覚などです。

ケタミン

ケタミンは「解離性麻酔薬^{*}」に分類される薬です。粉末か液状で、通常は動物用の麻酔薬として使用されます。この薬は、注射する、飲料に混ぜて飲む、鼻から吸入する、マリファナタバコや普通のタバコに加えるとといった方法で乱用されます。ケタミンは、1999年にアメリカ合衆国の規制薬物に指定されています。

短期的・長期的な影響としては、心拍数の増加や血圧の上昇、吐き気、嘔吐、麻痺、抑うつ、記憶喪失、幻覚などがあるほか、呼吸器の障害で死に至る危険性もあります。ケタミンを服用していると、この薬物に対する渴望が起こる場合があります。大量に服用するといわゆる「体外離脱」や「臨死体験」と呼ばれる状態を経験することがあります。

ケタミンを服用した人は夢を見ているような状態になり、身動きが取れなくなるため「レイプ・ドラッグ」として悪用されてきました。

薬品名

- ケタセット
- ケタラール
- ケタネスト

通称

- スペシャルK
- K
- スーパーC
- キャット・ベイリウム
- ジェット
- スーパーアシッド
- グリーン

^{*} 解離性麻酔薬：視覚や聴覚を歪め、環境や自分自身からの離脱感を生じさせる薬物。

市販薬の乱用

店頭で買うことのできる市販の風邪薬や咳止め薬にも、乱用目的で使用されるものがあります。これにはデキストロメトルファン（DXM）という薬物が含まれています。DXMはシロップ、ゼリー、錠剤の形で販売されています。インターネット上で粉末として販売されているものは、成分の配合や濃度をはっきりしないため、特に危険です。DXMを含む市販薬は非常に数多くありますが、よく乱用されるのはコリシディンとロビタシンです。

薬品名

- ブロン錠
- ブロン液
- 新トニン
- エフェドリン
「ナガキ」錠



咳止めシロップ(DXM)の影響

- 幻視
- 極端な興奮状態
- 不眠
- 倦怠感
- (長期間使用した場合)
身体的な依存
- 目まい
- ろれつが回らない
- 妄想
- 発汗
- 高血圧
- 肝障害、脳障害

咳止めシロップを他の種類の薬物と一緒に服用すると、
中枢神経や心臓に障害を引き起こす恐れがあります。
アルコールと一緒に服用するのは特に危険で、
死に至る可能性もあります。

E
W
E
R
G
E
N
C
Y

「**D**XMのせいで私が体験したことはこんな感じです。
血尿が出るようになりました。吐き気がするし…
体が衰弱した感じで…薬に取り付かれたようになっていて、
他のことはほったらかしでした…ハイになることしか頭に
ありませんでした…遊びで使うだけだから大丈夫と思っ
てたんです。まさか中毒になるなんて…後悔しても取り
返しがつきません。あの時に戻って、すべてを取り
消しにできるものならそうしたいです。」— クリスタル



国際的な統計

アメリカ合衆国では、12歳から17歳の若者が、毎日2500人の割合で処方鎮痛薬の乱用を始めています。

処方薬の乱用が最も蔓延^{まんえん}しているのはアメリカ合衆国ですが、それ以外にもヨーロッパやアフリカ南部、南アジアなど世界中のさまざまな地域で問題となっています。アメリカだけで1500万人以上が処方薬を乱用しています。これは、コカイン、幻覚剤、有機溶剤・吸入ガス、ヘロインの乱用者を合計した数を上回っています。

2006年、アメリカ合衆国では新たに260万人が処方薬の乱用を始めています。

アメリカ合衆国で2007年に実施されたアンケート調査では、回答前の1ヵ月間に処方薬を乱用したことのあ
る人は、12歳から17歳では3.3%、17歳から25歳では6%に上ることがわかりました。

薬物の過剰摂取による事故死のうち、最も多いのは処方薬の乱用によるものです。2005年、アメリカ合衆国では薬物の過剰摂取による事故死が2万2400件発生しましたが、最も多かったのはオピオイド系の鎮痛剤によるもので、死亡原因の38.2%を占めています。

過剰摂取による死亡事故

処方薬

45%

すべての
ストリート・
ドラッグ

39%

アンフェタミン

+

メタンフェタミン

+

ヘロイン

+

コカイン

2005年、アメリカでは処方鎮痛剤を取っている十代の若者（12歳から17歳）は440万人に上り、230万人がリタリンのような処方薬の中樞神経刺激剤を取っていました。咳止めシロップなどの市販薬を乱用していた若者は220万人に上ります。現在では、乱用を始めた年齢の平均は13歳から14歳となっています。



過剰摂取による死亡事故のうち、鎮静剤・安定剤、オピオイド、抗うつ剤による死亡は45%を占め、コカイン、ヘロイン、メタンフェタミン、アンフェタミンを合わせた数値（39%）を上回っています。アメリカ合衆国では、かつて都市中心部の黒人居住区が最も高い死亡率を記録していましたが、現在では地方の白人共同体がそれを上回っています。同様の傾向は、薬物乱用による入院と、過剰摂取による緊急入院の件数にも見られます。2005年、薬物に関連する緊急入院は104万件でしたが、

うち59万8542件が処方薬の乱用、もしくは処方薬とその他の薬物の併用に関連していました。

アンケート調査によると、十代の若者の半数近くが、処方薬は違法なストリート・ドラッグよりも安全だと考えています。また、6割から7割の若者が、自宅の常備薬を乱用していると答えています。

コロンビア大学の全米薬物依存・物質乱用センターによると、処方薬を乱用している十代の若者は、処方薬を乱用しない同世代の若者と比べ、アルコール

ルを常用する割合は2倍、マリファナを常用する割合は5倍、ヘロインやエクスタシー、コカインなどのストリート・ドラッグを常用する割合は12倍から20倍になります。

合衆国麻薬取締局の調べによると、2007年にフェンタニルという鎮痛剤の乱用により1000人以上が死亡していることがわかりました。この薬品の作用はヘロインの30倍から50倍も強力であるとされています。

「ザナックスを取る量がどんどん
増えていることに気がきました。

薬をやめるために仕事を休むことになりました。知らないうちに中毒になっていたのです。禁断症状のためにひどい悪寒に襲われました。4日間ベッドから起き上がれず、睡眠も食事も取らず、嘔吐を繰り返しました。幻覚も見ました。ザナックスを取るのをやめて3日目くらいに、身動きがぎくしゃくしてバランスが取れず、辺りの物にぶつかるとなりました。4日目には強烈な痙攣けいれんが始まり、ものすごく不安になりました。」

— パトリシア

薬物についての真実

薬物は基本的に毒です。その作用は、摂取する量によって決まります。少し摂取すると、活動をより活発にする中枢神経刺激剤として作用します。多めに摂取すると、活動を抑制する鎮静剤として作用します。さらに多量に摂取すると毒となり命を奪います。

これはどの薬物にも当てはまります。こうした作用を引き起こすのに必要な量に違いがあるだけです。

それだけではなく、多くの薬物には人の心にも影響を及ぼす弊害があります。薬物を取っている人が自分の周囲で起こっていることを知覚しても、それは歪んだものになってしまう可能性があります。その結果、その人の行動は奇妙だったり、不合理であったりするかもしれ

ません。暴力的になることもあるでしょう。

薬物はすべての感覚を遮断します。望ましい感覚も望ましくない感覚もです。そのため、短期的には痛みを和らげるために役に立ちますが、同時に人の能力や機敏さを消し去り、思考を不明瞭にします。

医薬品は、身体の働きを良くしようとして、何かを速めたり、遅くしたり、身体の働きを変えることを意図した薬物です。時には必要ですが、薬物であることに変わりはありません。中枢神経刺激剤や鎮静剤といった薬物を取り過ぎれば命を落とすこともあります。したがって、医薬品は規定通りに使用されない場合、違法薬物と同様に危険なものになり得ます。

本当の解決策は、
事実を認識し、最初から
薬物など使用しないことです。



なぜ人は薬物を取るのでしょうか？

人が薬物を取る理由は、自分の人生を変えたいと思うからです。

若い世代の人たちが薬物を取る理由には、以下のものがあります。

- 周りとうまくやっていきたい。
- 問題から逃避するため。
- リラックスするため。
- 退屈を紛らわすため。
- 大人になったような気がするから。
- 反抗するため。
- どんなものか試してみたい。

こういった若者は、薬物が問題を解決してくれると思っているのです。しかし、結局のところ薬物は問題にしかありません。

自分の問題に直面することが困難なこともあるでしょう。しかし、薬物によって解決しようとしている問題よりも、薬物を使用した方が常に悪い結果を招きます。本当の解決策は、事実を認識し、最初から薬物など使用しないことです。



参考文献:

“Drug Scheduling” U.S. Drug Enforcement Administration

“Selected Prescription Drugs with Potential for Abuse,” National Institute on Drug Abuse

International Narcotics Control Board

Office of Drug Control Policy

“Prescription Sedatives & Tranquilizers,” Partnership for a Drug-Free America

Statement by Leonard J. Paulozzi before Senate Judiciary Subcommittee on Crimes and Drugs, 12 March 2008

Center for Substance Abuse Research

National Survey on Drug Use and Health 2007

Suicidality, violence and mania caused by SSRIs: A review and analysis, P. Breggin.

“Depressants,” US Department of Health & Human Services and SAMHSA’s National Clearinghouse for Alcohol & Drug Information

“Prescription drugs a gateway for teen drug abuse,” *Houston Chronicle*, 4 September 2008

写真:

2ページ、9ページ: Stockxpert;

15ページ: Sweet Faux Pas;

24ページ: Wes Tarca

この小冊子を含む薬物防止教育小冊子のシリーズは、これまでに22の言語で出版され、世界中で何百万部も配布されてきました。新しいドラッグが次々と世の中に出回っており、その影響に関する新たな情報が知られるようになっていきます。本シリーズはそうした新しい情報を盛り込んだ最新版です。

これらの小冊子シリーズは、アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルスを拠点とする非営利の公益法人「薬物のない世界のための財団」によって出版されています。

財団は、その国際防止ネットワークを通して各種教育資料や助言を提供したり、調整を行ったりしています。また、青少年や保護者、教育者やボランティア団体、政府機関ばかりではなく、薬物乱用のない人生を送ることに関心のある人なら誰とでも協力しています。

真実を知ってください：薬物

この小冊子を含む薬物防止教育小冊子のシリーズには、マリファナ、アルコール乱用、エクスタシー、コカイン、クラック・コカイン、覚せい剤、有機溶剤・吸入ガス、ヘロイン、LSD、処方薬乱用についての正確な情報がまとめられており、読者が自分の意志で薬物のない人生を送ることができるように役立つ内容になっています。

さらに情報を知りたい方、またはこの小冊子シリーズのいずれかをさらに何部かご希望の方は、下記までご連絡ください。



Foundation for a Drug-Free World
1626 N. Wilcox Avenue, #1297
Los Angeles, CA 90028 USA
drugfreeworld.org
info@drugfreeworld.org
1-818-952-5260

薬物のない世界のための財団
日本支部
〒170-0001 東京都豊島区
西巣鴨1-17-5
パークホームズ西巣鴨308
TEL : 03-5394-0284
Eメール : info@drugfreeworld.jp
drugfreeworld.jp